

『ペルシャ人の手紙』第二版のミステリー

古賀 英三郎

モンテスキューの『ペルシャ人の手紙』の初版が 1721 年に刊行されたことについては誰も異論がない。しかし 1721 年の日付を持つ『ペルシャ人の手紙』の異なる版が、ジャン・デュフル (J. Duffour: *Recherches sur les éditions originales des Lettres Persanes*. (Bulletin du Bibliophile, 1939)) によれば 18 ある。そこから、どれが本当の初版かということが長い間問題になってきた。

この問題に決着をつけたのは、一つは、モンテスキュー自身が生涯の末頃執筆した『ペルシャ人の手紙』の「訂正ノート」である。このノートには大中小 3 種類あって、幅 18 センチ、縦 25 センチの中ノートには、冒頭に次のようにタイトルが記されている。

Corrections des Lettres Persanes sur la première édition imprimée à Cologne chez Pierre Marteau en 1721 en deux volumes in douze.

そしてこのタイトルの下に次のように注記されている。「第 1 巻の訂正。新しいコピー。このコピーはもはや最後のものではない。私は以後大きな紙になされたコピーに加えられた訂正を行った。必要の場合にはこのコピーを、そのコピーによって訂正できるだろう」。つまり幅 24 センチ、縦 37 センチの大ノートが最終稿で、それには「最後のコピー」と記されている。今ここでモンテスキュー自身によるこの訂正作業の中味に立入ることはできない。今重要な点は、モンテスキュー自身が初版を指摘している点である。

しかしこの指摘だけではまだ初版の確定はできない。A Cologne, chez Pierre Marteau と記載のある 1721 年版は、少なくとも四つあるからである。そのなかの、訂正のための組替え頁のある版が真の初版である。それはタイトル頁が黒と赤とで印刷され、第 1 巻の花形は組合せ文字、第 2 巻のそれは手を取り合った 2 人の子供である。このことはもはや動かない。しかしそれは表に現われたタイトルについてのことで、A Cologne, chez Pierre Marteau というのは偽装で、実は Amsterdam, Jacques Desbordes だと断言するのがポール・ヴェルニエール (Paul Vernière のガルニエ版『ペルシャ人の手紙』への序言) である。ただし彼はその根拠をあげていない。とはいえモンテスキュー自身が友人に『ペルシャ人の手紙』をオランダで印刷させていると語ったという証拠はある。

以上のことから二つの問題が生まれてくる。その一つは、やはり 1721 年版のアムステルダムで出版され、A Amsterdam, Chez Pierre Brunel; sur le Dam. と記されている版は偽造版なのかどうかという問題であり、いま一つは、同年の日付の *Seconde édition, revue, corrigée, diminuée et augmentée par l'auteur*, A Cologne, Chez Pierre Marteau にまつわる問題である。前者については意見が分れている。古くはランドラン (A. Landrin: *Le véritable édition originale des Lettres Persanes*. (Le Conseiller du Bibliophile, t. I, 1876)) が、それを偽造版とみなしたが、ヴィアン (L. Vian: *Histoire de Montesquieu*, 1879) は、初版ではないにしても偽造版とは断定していない。とはいえ、このアムステルダム版にも少なくとも 4 種類あるから、偽造版でないとする、この 4 種類のうちどれがそれかを確定しなければならない。この問題に、誤植が多い方が初版に近いと見る見方を誤りとし、重刷はむしろ誤植を生むとの見地から、誤植の少ない版を正しい版とみて解答したのが、バルコーザン (H. Barckhausen: *Montesquieu; les «Lettres Persanes» et les archives*

de la Brède. (Revue du droit public et de la science publique en France et à l'étranger, juillet 1898).)である。それによると、四つの A Amsterdam, Chez Pierre Brunel; sur le Dam のうち、第1巻のタイトル・ページに花飾りで取巻かれた巻軸装飾と花瓶のカットのあるもの、第2巻のタイトル・ページに球体のカットのあるものが正しい版とされた。それ以外は偽造版ということになる。ただし誤植の多いか少ないかの差だけで偽造版と正版とを見分けることが正しいやり方といえるのか疑問が残る。この疑問を更に強めるのが、モンテスキュー自身の『私の随想』のなかの次の言葉である。「この本（『ペルシャ人の手紙』のこと）のあらゆる版のうち、良いのは初版だけである。それは出版社の無謀さを少しも受けなかった。それは1721年にケルンで、ピエール・マルトーのところで印刷され出版された」(Mes Pensées, 2033(112))。この言葉は、モンテスキュー自身が初版を指摘している点で注目に値するが、A Amsterdam, Chez Pierre Brunel 1721 を、モンテスキュー自身は偽造版とは言っていないが、「出版社の無謀」を蒙った、よくない版とみていることは確かであろう。前出のヴェルニエールは、四つのアムステルダム版のいずれかを特定せずに、アムステルダムと表記のある版は、実はルウアンの地下出版社から出版されたものと断定している。だが偽造版だとは言っていない。

さて上記の第2版の問題であるが、ヴォルテールが『ルイ14世の世紀』の「人名録、フランスの作家」のなかで、次のように書いたのが問題の始まりである。「アカデミー・フランセーズは、『ペルシャ人の手紙』の中で悪し様に言われたにもかかわらず、この本に認められる天分のために、モンテスキュー法院長にその門を開こうとした。だが同時に彼は、政体や宗教の迷妄について思うままに述べたために、フルーリー枢機卿の反対に遭う。彼はこの大臣を味方にするために非常に巧妙な策略を用いた。ほんの数日のうちに、自分の本の新しい版を刷らせ、その版では、枢機卿にせよ、大臣にせよ、非難できそうな箇所はすべて削除し、あるいはその表現を和らげた。モンテスキュー氏は自ら枢機卿のもとにこの本を届ける。ほとんど読書の習慣のない枢機卿だが、この本の一部には目を通した。この信頼を示す態度と、数人の権威ある人々の好意によって、枢機卿の機嫌を直すことができ、モンテスキューはアカデミー入りを果たした」。これが、ヴォルテールによる説明であるが、ヴォルテールが言及している『ペルシャ人の手紙』の¹⁷²¹刺抜き改定版が、1721年の日付を持つ第2版だとしたのが、上記のヴィアンである。

ヴィアンは、その匿名小冊子 (Montesquieu: sa Réception à l'Académie française, et la deuxième Edition des «Lettres persanes» [par Louis Vian], Paris, Didier et Cie [1869]) で、1727年12月11日にフルーリー枢機卿の反対に遭ったモンテスキューが、この反対を和らげるためにこの第2版を出し、同年12月20日に枢機卿の好意を克ち得たという解釈を示して、ヴォルテール説を裏づけた。この場合、1721年という日付は、antidater (日付を実際より前にすること) ということになる。だがヴィアン自身がその『モンテスキューの経歴』(Histoire de Montesquieu, 1879)で自説を撤回し、第2版1721年刊行説をとった。ヴィアンのこの意見変更の背後には一連の批判がある。

その一つは、既出のランドランの批判である。それは、12月11日から19日までの8日間に原稿をケルンに送り、重刷させ、校正刷を訂正し、製本させ、パリに持参させることは不可能だといっているのである。当時はパリからケルンに行くだけで8日かかった。ヴェルニエールが言うように、ケルンが偽装でアムステルダムが真実だとしても、ランドランのこの批判は一層妥当する。アムステルダムはケルンよりもパリから遠いからである。

ただしモンテスキューのアカデミー入り騒動は、1727年に初めて起こったのではない。既に1725年にモンテスキューはその候補となり、故ロケット師の後任として臨時に選出されたが、パリに住

居がないという口実でアカデミーに席を占めることを許されなかった。この時点で実際には既に『ペルシャ人の手紙』が入会拒否の理由として働いていたのである (Docteur Henri Fischer: Montesquieu et le deuxième fauteuil de L'Académie Française. s.d.)。従って 1728 年 1 月 5 日に正式に入会を許されるまでには、かなりの時間があつたことになり、この間に第 2 版を作ることも可能であつた筈である。

こうした想定を覆すもう一つの事実がでてきた。それは、この第 2 版に、手書きで、*ex-libris de la Princesse de Lippe, 1722*。つまり「リップペ王女の蔵書、1722 年」と記入された 1 冊が見つかったのである (J. Duffour: *Recherches sur les éditions originales des Lettres Persanes*. (Bulletin du Bibliophile, 1939))。ここに言う「リップペ王女」とは、1720 年に神聖ローマ帝国の王になつたリップペ・デトモルトの後のことと解される。いずれにせよ、第 2 版は日付通り 1721 年の刊行というのは動かないこととなつた。

第 2 版にまつわる問題がもう一つ別にある。それは、初版が 150 通の手紙からなつていたのに、第 2 版では初版の 13 通の手紙が削られ、新たに 3 通加えられて、合計 140 通に減つているという事実である。ヴォルテールは、この改訂を、アカデミー入りを果すための刺抜き作業と解したわけであるが、果たしてそう解釈できるであろうか。

ヴォルテール伝説に反対するランドランは、『ペルシャ人の手紙』には多くの称賛者と同時に誹謗者もいて、彼らの批判と、「私には本を作り、作ってから恥じ入る病気がある」(Mes Pensées, 837(83)) と自ら書いた自分の気質とから、「いかなる下心もなく」、専ら作品を完全にすることを削除と追加を行つたと解釈した。しかしそれがどのような意味で「完全」になつたのかは明らかになつた。

この問題に、今日までかなり影響力のある解釈を下したのが、バルコーザンの既出の論文である。彼は削除された手紙と追加された手紙との内容を検討することによって、第 2 版が、内容的にモンテスキューのアカデミー入りに貢献しなかつたこと、つまり刺抜き作業ではなかつたことを論証し、削除・追加の改訂の意味を、ルイ 14 世の宗教上の迫害の結果オランダに亡命しているフランスのプロテスタント、つまりユグノーの感情を傷つけないよう——従つて彼らに大いに買ってもらふよう——配慮したのだという点に求めた。つまりカトリックを傷つけるものは残し、カルヴィニストを傷つけるものは削除したというのである。

この改訂作業は、モンテスキューの同意のもとに行われたのか、それとも出版社が勝手にやつたのか、という問題が生じる。既述の通り、モンテスキュー自身、「あらゆる版のうち、良いのは初版しかない」と書いているのだから、この第 2 版は、「出版社の無謀」を蒙つた悪い版とみることもできるし、モンテスキュー自身がある手紙のなかで他人事のように、『ペルシャ人の手紙』の第 2 版が幾つかの訂正を伴つて出版されようとしていると、オランダから知らされた(1721 年 7-8 月の、モンテスキューのコーポ宛の手紙)と書いているから、この第 2 版の刊行にモンテスキュー自身は関与していなかつたと考えることもできる。しかし他方では、初版にはない新しい手紙が 3 通加わつているのだから、モンテスキューが関与しなかつた筈はないと考えることもできる。そこでこの第 2 版へのモンテスキューの関与の有無について、意見は二つに割れることになつた。関与説をとるのは、ヴェルニエール、デュフルなど、関与否定説をとるのはカルカソンヌ (Carcassonne) による、1929 年刊行の『ペルシャ人の手紙』への序文(注)であるが、バルコーザンの見解はかなり微妙である。「アムステルダム出版社は、認可されていない大きな自由を認められたらしい」。

(注) カルカッソヌが関与否定説をとる根拠として、モンテスキューが『私の随想』のなかに、「この著作は、誕生の時から著者によって放棄された」と書いていることもあげていることに注意しよう。

しかし問題を複雑にするもう一つの事情が加わる。モンテスキューが「良いのは初版しかない」と書いたのは、1754年版に初めて発表される『『ペルシャ人の手紙』に関する幾つかの省察』の草稿においてであって、それは「編者の序」と題して『私の随想』(2033)に収められている。前段落の注にでてくるモンテスキューの言葉もこの草稿のなかにある。従って初版以来「放棄」して省みなかった『ペルシャ人の手紙』に、1754年版になって初めてモンテスキューは意識的に関与したのだと解釈することもできるのである。初版に次ぐ良い版を1754年版で出そうというわけである。ところがこの1754年版を出すに当って、モンテスキューは初版と同時に第2版も利用しているのである。このことが事柄を複雑にする。

そこでこの1754年版の体裁を見てみよう。出版社は、Cologne, P. Marteauで初版と同じ。172頁と205頁の2巻本で数語を除き、初版の150通の手紙が転載されている。第2巻に28頁の「補遺」(Supplément)がつけ加えられている。そこでこの版は「補遺つき版」とも呼ばれる。この「補遺」には、まず既出の『『ペルシャ人の手紙』に関する幾つかの省察』と11通の『ペルシャ人の手紙』が収められている。そのうち8通は未発表である。最後に最初の幾つかの手紙の異文が掲げられている。

そこで『補遺』のなかの11通の手紙についてやや詳細にみてみよう。初版、第2版ともになく、1754年版の「補遺」に初めて現われるのは、現行(現行の版は、1758年版全集第3巻所収のものによっている)の第15信、第22信、第77信、第91信、第144信、第157信、第158信、第160信の8通である。初版になく、第2版に初めて現われ、1754年版に転載されたのは、第111信、第124信、第145信の3通である。モンテスキューは第2版に新たに追加された3通の手紙をそっくり1754年版に転載しているわけである。この第2版をモンテスキューが関与しなかったものとみなしうるのか。上記8通と3通とを加えると、初版の150通は合計161通となる。これが1758年版『全集』第3巻に収められた『ペルシャ人の手紙』である。

ところで初版(通称これをA版と呼ぶ)と第2版(これをB版と呼び、1754年版をC版、1758年版をD版と呼ぶのがモンテスキュー研究者のならわしである)との関係について新説が現われた。それはクラムパッカーの『『ペルシャ人の手紙』の隠された鎖とB版のミステリー』(M.M. Crumpacker: The Secret Chain of the Lettres persanes, and the mystery of the B édition (Studies on Voltaire. . ., vol. CII, 1973))と題する論文においてである。それによると、モンテスキューの書記がB版の草稿を携えてオランダへ行く途中にあったとき、モンテスキューは幾つかの変更を思いついた。書記が最初の使命を終え帰宅したら直ちに出版社にとって返すことができるように、モンテスキューは改訂版のために猛烈に働いた。出版社はベスト・セラーの原稿を入手したと解して、タイプをセットし始めていた。そこへ書記が改定草稿(A版の)を携えて戻ってきたので、出版社はいよいよながらすべてを再びやり直し始めた。変更は第1書簡から始まっていたから、後に第2版として出版する版のために最初の数通をとっておいた。以上がクラムパッカーの、A版B版の印刷事情にかかわる推測である。つまりこれによると、最初にB版の原稿があり、続いて改定版としてのA版の原稿があり、B版の原稿にA版の最初の数通を加えたものが、「第2版」として刊行されたことになる。つまり執筆順序は、A→B→Cではなく、B→A→Cで、これを図示すると下記のようになる。

	道 徳	社 会	政 治	クラムパッカーは『ペルシャ人の手紙』全
	(1-45)	(46-88)	(89-161)	体が三つの部分からなると解し、第1部
B			111,124,145	(第1信-第45信)は道徳を、第2部(第46
A	1,5,10,16,25,	47,65,70,71		信-第88信)は社会を、第3部(第89信-
	32,41,42,43,			第161信)は政治を論ずると解釈するのだ
C	15,22	77	91,111,124,144	が、まずB版の草稿があり、その140通の
D			145,157,158,160	うち3通が削られ、13通がつけ加わること

によってA版ができ、更に11通がつけ加わってC-D版となるとするのである。A版の草稿は急いで書いたもので、不注意な誤りがあり、入念に書かれたB版には、文体修正のために立ち帰る必要があったとする。この解釈だと、プロテスタント向けB版というバルコーザンの解釈は意味を失う。この解釈に立って初めて『ペルシャ人の手紙』の「隠された鎖」が理解しうるとするクラムパッカーの説に立入るのはここでの課題ではない。

(一橋大学社会学部教授)

16-18 世紀法学文献コレクション

——法学文献社会学の対象として——

勝 田 有 恒

このコレクションは、去る1981年(昭56)に百年募金購入図書(法学部門)として購入され社会科学古典資料センターに収蔵されている。その中味は、法学博士学位請求論文(Dissertation inauguales) 17, 186点および法学関係単行論文(Traktat) 487点を、四つ折版(Quarto) 616巻に装丁した可成大きなコレクションである。このコレクションは、特定の学者や収集家によって収蔵されていた文庫でもなく、また特定の研究領域の関連文献・資料を収集したものでもない。非常に特殊なコレクションである。その特徴は、ヨーロッパ大陸における中世イタリア法学の普及と発展の結果生み出された法学文献タイプのうちの2つを集中的に収集したものであって、ヨーロッパ大陸法学の発展過程に関する重要な資料群とみることができ、とくに法学学位請求論文は、旧ドイツ領域が作り出した特別な法学文献の類型である。

15世紀中葉以降、大学で法律学(ローマ法・教会法)を修得した法学識者の進出に伴って、ドイツ(神聖ローマ帝国)においては、ローマ法継受現象(Rezeption)が漸進的に進行してゆくが、その継受の対象は、12世紀から14世紀にかけてイタリアの法学者によって完成された中世イタリア法学の方法および法学説であった。それはイタリア学風(mos italicus)と呼ばれるもので、ユスチニアヌス法典(Digestum vetus, Infortiatum, Digestum novum, Codex, Volumen)(後のCorpus iuris civilis)の釈義を行うものであり、今日の法解釈学Rechtsdogmatikの原型に相当するともいえるのであるが、法文の釈義といっても、それは極めてスコラ的なリゴリスティックなもので、16世紀のグリバルドス(M. Gribaldus Mopha)の要約によっても次の8段階からなり立っている(De methodo ac ratione studendi libri tres, 1541), すなわち「(1)序言し(Praemitto), (2)分析し(scindo), (3)要約し(summo), (4)事案を構成し(casum figuro), (5)精読し(perlego), (6)理由を示し(論証し)(do causas), (7)註釈を付し(connoto), (8)反論する(objicio)」ことによって一つの原典法文の註釈や註解が終了する。大学におけるこのような註釈すなわち講義の方法が16世紀にはドイツの法学教育に定着していたのであるが、12世紀以降上記の釈義手続の各段階ごとに、法律学文献の諸類